

{佛隆寺} 宇陀市榛原にある真言宗室生寺派の寺。興福寺の修円の創建ともいわれるが、平安時代前期(850年)に空海の高弟の堅恵(けんね)により創建され、室生寺の南門の末寺とされた。空海は唐から茶を持ち帰り、ここで茶を栽培し、その後大和に茶の栽培が広まったので、大和茶発祥の地とされる。

本堂に向かう197段の両側には、春には桜、秋には彼岸花が咲き乱れる。特に有名なのは、樹齢900年以上の巨木の千年桜で、奈良県野天然記念物である。

本堂 一本尊として聖徳太子の作とされる十一面観音立像が安置されている

茶臼 空海が唐より持ち帰ったと伝えられている

石室(重要文化財) 内部に堅恵の墓と伝えられる五輪塔がある

十三重石塔 元徳2年(1330年)の銘がある供養塔

{室生古道} 室生寺には東西南北に末寺が配され、東は長楽寺、西は大野寺、南は佛隆寺、北は丈六寺で参詣四門といわれた。

伊勢街道の宿場の「高井」から佛隆寺を経て、そこから唐戸峠を経て室生寺へ至る道は「室生古道」と呼ばれた。

{龍穴神社・吉祥龍穴} 室生寺から東へ1km行くと龍穴神社(高龍神)があり、この神は雨乞いの神として数多くの雨乞いの神事がここで行われた。

さらにこの神社より東へ行くと、天の岩戸と呼ばれている大きな破れ石があり、もう少し行くと滝の流れる溪流の対岸に洞窟がある。これが龍神の住むという洞穴「吉祥龍穴」で、古くから龍穴信仰が生まれた。

龍の背中の鱗に見えるごつごつした岩は、室生赤目青山国定公園一帯に見られる柱状節理の花崗岩である。

{室生寺} 現在は真言宗室生寺派大本山の山岳寺。女人禁制だった高野山に対し、女性の参詣が許されていたことから「女人高野」の別名がある。

奈良時代の『続日本紀』によると、奈良時代末に、山部親王(のち桓武天皇)の病氣平癒のため、室生の地で延寿を修したところ、龍神の力で回復したので、興福寺の僧の賢憬(けんけい)が朝廷の命でここに寺院を造ることになったという。このことから室生寺の草創には龍神を祀る龍穴神社が関係しているといえる。

寺の造営は、現存の室生寺の堂塔の中で、この時期(800年ごろ)にまでさかのぼると見られるのは五重塔のみで、現在のような伽藍が整うまでには相当の年数を要している。

{あさぎりの里公園} 日本でも最大級の地すべり地域である室生に地すべり対策の一環で造られた公園。「むろうアルカディア(理想郷)計画」に基づき、室生

寺との景観の調和を踏まえて、地すべり対策工事で傷ついた田園風景を修復し、来訪者に楽しんでもらえるようにと造られた公園。

その中にある「あさぎりホール」には、地すべり災害への対処方法や地すべり対策事業の必要性を学ぶ施設もあり、3D映像で地すべりを体験したり、地すべりの力と力くらべをしたりして遊べる。

**{西光寺}** 天正8（1580）年創建の融通念仏宗の寺で、樹齢300年以上の「城之山桜」がある。大野寺のシダレザクラの親木だとも伝えられている。

**{大野寺}** 室生口大野駅の南に大野寺(真言宗)があり、境内にはシダレザクラが美しい。寺伝では、飛鳥時代後半(681年)に役小角により創建され、その後、空海が本尊の弥勒菩薩立像を安置して、慈尊院弥勒寺といわれ、室生寺の末寺として室生寺の西の大門だった。本堂には木造地藏菩薩座像(国重文)が安置されている。

宇陀川を挟んで対岸の石英安山岩に彫られた総高13.8mの「弥勒如来立像(磨崖仏)」は日本最大級である。この像は興福寺の僧の雅縁が発願し、鎌倉時代初めに宋人の石工が笠置寺の弥勒磨崖仏を模して作ったとされ、落慶供養には後鳥羽上皇が訪れた。

**(サクラの原種)** サクラの原産地はヒマラヤ近郊と考えられており、北半球の温帯に広く分布している。日本でも、ヒマラヤ山脈の上昇が激しくなった数百万年前の地層からムカシヤマザクラの葉の化石が見つかっている。

自生種は主に北半球の温帯に広く分布しているが、美しい花の咲く種類は東アジアに集中していて、ヒマラヤに3種、中国に33種あり、日本にはオオシマザクラなど9種のサクラがある。

戦時中に日本軍がミャンマー北部で見渡す限りの山を覆うピンク色のサクラを見つけ、こんなところにサクラがあるとは、と驚いたという話があるが、秋咲きのヒマラヤザクラと思われる。

自生種のサクラはヨーロッパから西シベリアには3種、北米には2種あるが、いずれもミザクラで、東アジアのサクラほど美しくはないという。

日本での自生種ではオオシマザクラなどがあるが、自然環境に合わせて多様な種類が栽培されてきて、今では400種以上のサクラがあるといわれている。

**(サクラの語源)**

民俗学的な説… 暦がなく、季節感もあいまいだった昔、美しく咲くサクラの花が、農事を開始するころ満開をむかえる。そういったことから、サクラの「サ」は田の神をさし、サクラの「クラ」は神の台座の意で、サクラが稲の種まきのころ咲き誇ることから、「穀物の神の依代(よりしろ)」＝サクラと呼ばれるようになったのではないかとする。

(担当 羽尻・上西・富井)